

育てたい介護福祉士

日常の最も近くにある仕事

ハーベスト医療福祉専門学校の介護福祉学科は、相手の人生が心豊かなものであることを常に願いながら、その人生を共に歩くことのできる人間を育てたいと考えています。

介護福祉士の仕事は、高齢者・障がい者の生活をサポートすることです。高齢者・障がい者の周囲には、たくさんの方がいます。疾患や外傷を治療させる仕事があり、その治療プロセスを医療に関するそれぞれの専門分野から支えている仕事がある。そのいくつもの仕事のなかで、高齢者・障がい者の日常生活の、最も近い場所にいるのが介護福祉士です。

人の人生は、大部分が日常生活から成り立っています。日常生活を心豊かに過ごすことができれば、その人生は心豊かなものであるといえる。本校はそう考えています。だからこそ、自らの仕事を通して、相手の人生を、どうすればもっと心豊かなものにするることができるのか、という問いに、心を砕いて応えようとする姿勢を持つ介護福祉士を育てたいと考えているのです。

安全性と快適さという基本

高齢者・障がい者の「安全」と「快適」に心を尽くすことは、介護福祉士に求められる基本的な姿勢であると考えています。食事、入浴、排泄、衣服の着脱などのサポート、車椅子への移乗・移動補助、歩行補助に加えて、ベッドのメイキング、部屋の清掃など、介護福祉士の仕事の種類は多岐にわたりますが、そのすべてに、安全を守るための確かな知識・技術および迅速な状況判断と、心地良さを実現するための真心が必要です。本校は安全と快適を確実に提供できる介護福祉士としての基本づくりに、徹底して時間をかけています。

介護に関する専門知識を学ぶ授業に加えて、実習にも力を入れ、とくに実習の事前・事後の指導を徹底しているのは特徴のひとつです。介護福祉学科の学生たちの就職先には、さまざまな種類の施設があります。老人保健施設、特別養護老人ホーム、デイサービス施設、障がい者養護施設・支援施設などが代表的なもので、それぞれ施設において介護福祉士に求められるものは少しずつ異なります。ひとつではない正解を、ひとつずつ体験し、ひとつずつ確認しながら身につけていくためには、実習の効果を最大限に高める工夫が必要です。

納得して受けることのできる介護を

介護福祉士が向くべき相手は、高齢者・障がい者だけではなくありません。介護の現場では、対象者とそのご家族が、現在の状況に納得して日々を送ることが不可欠です。だからこそ、納得につながる根拠を、本人と家族の日常の最も近くにいる介護福祉士が持つことが、大切になるのです。

講義カリキュラムには、医学の基本を学ぶ「医学一般」を充実させる一方で、「リハビリテーション論」も

介護施設に就職した卒業生の現場風景。「ひとりを尊重する姿勢」をいくつも重ねながら、ハーベストの卒業生たちは誰からも信頼される介護福祉士を志しています。

多くのコマ数を設けています。医学および理学療法の知識を取り入れることで、日々の介護に「自立支援」の発想をプラスすることができるからです。こうした介護のことを、根拠に基づいたケア、と本校では呼んでいます。

心豊かに生きることを支える

「安全」と「快適」を約束されてさえいれば、人は幸せだろうか。その内面は豊かだろうか。それは、介護福祉士としての経験が豊富な教員の多い介護福祉学科が、今日の現場に対して、未来の介護福祉士である学生たちに対して、日々問いかけていることです。

自立して生活していける私たちにとって、安全と快適は、最低限の基本です。基本の上に、自分にこそ与えられた役割（職業や責務）と、自分だからこそ見つけられた楽しみ（趣味やエンターテインメント）が加わって、それらにプラスの力をもちあわせることができるから、人は楽しんで生きていくことができる。高齢者・障がい者にとっても同じです。

介護の対象となる一人ひとりが、自分が自分であることをより楽しみながら生きていくことのできる介護現場

安全と快適だけでは足りない。高齢者・障がい者が日常の生活を楽しみたいと感じられることが大切であり、そのことを支えられる現場でなければならない。本校は、こうした取り組みに、介護現場を担う一員としての意識を育むことをめざしてきました。

授業単位として認定されるものだった「やすらぎケア」は、2014（平成26）年度から、「ライフケア検定」（一般社団法人ライフケア検定協会認定）として形を変えていきます。身体にはたらきかける「フィジカルケア」と、心にはたらきかける「メンタルケア」によって構成され、高齢者・障がい者の心にさまざまな意味での「豊かさ」を届けられる介護福祉士を育むための検定です。

信頼に足る人物に

確かな知識と技術、冷静な判断力と柔軟性、相手の心豊かな人生を共に追求しようとする心が、高齢者・障がい者の心に届くために、大切なことがあります。

それが、人間性です。人間性は目に見えるものではありません。それでも、介護福祉士たちは、初対面の高齢者・障がい者やそのご家族に、自分のことを「信頼に足る人物だ」と思ってもらわなければなりません。

本校が、言葉遣い・立ち居振る舞いを含む礼儀作法を徹底して指導するのは、それぞれが持つ人間性を、目に見えるものとして相手に示すためです。例えば「敬語」は年長者を敬う姿勢を、「きちんとした服装」は出会え

を増やしていきたい。そう考えた本校は、2008（平成20）年の開校から、高齢者・障がい者の心に豊かさを届けるための取り組みを、授業として導入しています。

生きる楽しさを届けたい

そのひとつが、音楽を楽しむことを通じて心身の活性化を図る「シルバリーリトミック」です。幼児教育に用いられるリトミックを高齢者向けにアレンジしたもので、心身の記憶を呼び戻し、前向きな気持ちを育む効果が期待できます。また「ブックトーク」は、介護現場でこれまで多く行われてきた朗読やストーリーテリングの要素に加えて、人が自ら本へ向かうきっかけをつくる取り組みです。

さらに、手のぬくもりを通じてリラクセスする、他者の目に映る姿を意識する、季節の移ろいを楽しむといった「プラスαの価値」を、対象者の日常に届ける「ライフケア」（従来の「やすらぎケア」を発展）の授業も実施しています。この取り組みには、対象者と豊かなコミュニケーションを図ろうとする気持ちを後押しする技術を身につける目的もあります。

たことへの喜びを、ていねいな仕草は相手への思いやりを伝えます。形が伝達してくれるメッセージが、相手の心のなかで信頼へと変わります。

前述したプラスαのケアを学ぶ授業は、「高齢者・障がい者⇄介護者間」のコミュニケーションの入り口となることを期して取り組んでいるものでもあります。介護福祉士としての共通した素養を備えた学生たちにも、個性があり、それぞれの得意・不得意があります。だからこそ、相手と豊かなコミュニケーションを築いていくためのきっかけになり得るものを、本校はひとつでも多く提案したいと思っています。また、学ぶプロセスを通して、相手のすべてに心を配り、どう感じているだろう、どんなふうに変わっただろう、次にしてほしいことはなんだろう——と考えることが、学生個々の、介護福祉士としての資質をより高めてくれると考えているのです。

超高齢社会を迎えている今日の日本で、介護福祉の現場は、さまざまな面から変化しようとしています。そのなかで働く介護福祉士にとって、大切なことがふたつあると本校は考えています。ひとつは、人を思い、人の幸せを願うやさしい気持ちを、いつも持ち続けていられる心です。もうひとつが、「どうしたら今よりもっと良くなるだろう」という向上心を持って、新しい考え方やケアに取り組んでいく姿勢です。このふたつを携え、他者からの信頼と期待を受けとめることのできる人間性を通して、未来の介護福祉の現場を支えるひとりになることを、すべての学生たちに願っています。

